防人（さきもり）の歌

しまねの古代文化連続講座
於日比谷コンベンションホール
令和五年八月十九日
大谷雅夫

＊百済　新羅　白村江
＊防人部領使（ことりづかい）
＊天平勝宝七歳（七五五）
＊「拙劣の歌」

《資料一》『万葉集』巻二十

わが妻（つま）はいたく恋（こ）ひらし飲む水に影（かご）さへ見えてよに忘られず

（遠江・四三二二）

私の妻はひどく恋しがっているらしいぞ。飲む水に影になってまで見えて、とても忘れられない。

和我都麻波伊多久古非良之乃牟美豆尓加其佐倍美曳
弖余尓和須良礼受
右一首主帳丁麁玉郡若倭部身麻呂

《資料二》『万葉集』巻十五　遣新羅使の歌

我妹子（わぎもこ）がいかに思へかぬばたまの一夜（ひとよ）も落ちず夢（いめ）にし見ゆる

（三六四七）

我が妻がどのように思っているからか、（ぬばたまの）一夜も欠かさずに夢に見えることだ。

《資料三》『万葉集』巻十二

我妹子し我を偲ふらし草枕旅の丸寝に下紐解けぬ

（三一四五）

妻が私を偲んでいるらしい。（草枕）旅先で衣を着たまま寝ていたら、下紐がひとりでに解けた。

《資料四》『万葉集』巻十四　東歌

左努山に打つや斧音の遠かども寝もとか児ろが面に見えつる

（三四七三）

左努山で打つ斧の音のように遠いけれど、共寝したいと思ってくれてるのだろうか、あの子が面影に見えたのは。

《資料五》『万葉集』巻二十　父母を思う防人の歌

㋐父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ

（遠江・四三二五）

父さん母さんが花であったらなあ。（草枕）旅は行くにしても手に捧げて行こうものを。

㋑大君の命恐み磯に触り海原渡る父母を置きて

（相模・四三二八）

天皇のご命令を恐れ慎んで、岩にぶつかっては海原を渡ってゆくのだ。父母を残して。

㋒水鳥の立ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき

（駿河・四三三七）

（水鳥の）立ち出る準備のために、父母に言葉もかけずに来てしまったことが、今さら悔やまれる。

㋓忘らむて野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも

忘れようと野を行き山を越えて私は来たけれど、父母のことは忘れることがない。

（駿河・四三四四）

㋔父母が頭かき撫で幸あれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

父さん母さんが頭を撫でながら、無事でな、と言った言葉が忘れられない。

（駿河・四三四六）

㋕わが母の袖もち撫でて我が故に泣きし心を忘らえぬかも

私の母が袖で撫でて、俺のために泣いてくれた心が忘れられない。

（上総・四三五六）

㋖母刀自も玉にもがもや戴きてみづらの中に合へ巻かまくも

母上が玉であったらなあ。頭に載せて、みずらの中に巻き入れてこようものを。

（下野・四三七七）

㋗摂津の国の海の渚に船装ひ立し出も時に母が目もがも

摂津の国の海の渚で船を整えて、出港する時にはせめて母さんの顔が見たいなあ。

（下野・四三八三）

㋘天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ

天地のどの神様に祈ったら、恋しい母さんにまた言葉をかけられるだろうか。

（下総・四三九二）

㋙ちはやふる神のみ坂に幣奉り斎ふ命は母父がため

（信濃・四四〇二）

（ちはやふる）神の御坂に手向けをして、わが命の無事を祈るのは、母さんと父さんのためなのだ。

＊正丁

＊天平八年（七三六）

《資料六》『詩経』・魏風「陟岵」

彼の岵に陟りて、父を瞻望す。父曰く、嗟予が子、役に行きて、夙夜已ること無かれ。上たるときはこれを慎しめ。来るべし、止むること無かれ、と。

あのはげ山に登って父の住む故郷のかたを眺める。父さんは仰った、「ああ我が子よ、いくさに行くなら、朝夕、怠けてはいけない。部隊にいる時は、慎重にふるまいなさい。帰ってきてもいい。しかし、勤めをやめてはならないぞ」と。

○毛伝、「父、義を尚ぶるなり」

＊小序

《資料七》『詩経』小雅「四牡」

豈に帰るを懐はざらん。王事盬きこと靡し。我が心傷悲す。

どうして、家に帰りたいと思わないことがあろう。しかし、王のための仕事は決しておそろかにはできない。心を痛めるばかりなのだ。

○毛伝「帰るを思ふは私恩なり。盬きこと靡しは公義なり」

○鄭箋「私恩無きは孝子に非るなり。公義無き

は忠臣に非るなり。君子は私を以て公を害せず。家事を以て王事を辞せず」

《資料八》『万葉集』巻二十

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は

（下野・四三七三）

右の一首は、火長今奉部与曾布。

今日からは後ろをふり返ることなどせず、天皇をお守りする至らぬ御楯として出発するのだ、私は。

《資料九》『小学國語讀本』

第十五　萬葉集

今を去る千二百年の昔、東國から徴集されて九州方面の守備に向かつた兵士の一人が、

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出立つわれは

といふ歌をよんでゐる。「今日以後は、一身一家をかへりみることなく、いやしい身ながら、大君の御楯となつて、出發するのである。」といふ意味で、まことによく國民の本分、軍人としてのりつぱな覺悟をあらはした歌である。かういふ兵士や其の家族たちの歌が、萬葉集に多く見えてゐる。

悟

＊齋藤茂吉「万葉秀歌」

《資料十》『万葉集』巻二十

天地の神を祈りてさつ矢貫き筑紫の島をさして行く我

は

右の一首は、火長大田部荒耳。（下野・四三七四）

天地の神を祈って、矢を胡籙に刺して、筑紫の島を目指して行くのだ、私は。

《資料十一》『万葉集』巻二十

常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ

右の一首は、信太郡の物部道足。（常陸・四三六六）

常陸を指して飛んで行く雁でもいてくれないかなあ。私の恋の思いを記して付けて妻に知らせようものを。

＊雁信

＊蘇武

＊匈奴

《資料十二》『漢書』蘇武伝

天子、上林の中に射て、雁の足、帛書を係くる有るを得たり、言はく、武等、某の沢中に在りと。

《資料十三》『万葉集』巻十五

天飛ぶや雁を使ひに得てしかも奈良の都に言告げやらむ（三六七六）

（天飛ぶや）雁を使いとして手に入れたいものだ。奈良の都の人に手紙を送ろう。

＊蘇我馬子

＊物部守屋

《資料十四》『日本書紀』崇峻天皇即位前紀

捕鳥部万曰く、万は天皇の楯として、その勇を效さむとすれども、推問ひたまはず。翻りてこの窮に逼迫めらるることを致しつ。

捕鳥部万は、「私は天皇をお守りする楯となって、武勲を挙げようと努めてきましたのに、それをお訊ねもくださらず、かえってこの窮地に追い詰められるようになさるとは。」と言った。

《資料十五》『詩経』周南「兎罝」

肅肅兎罝　肅肅として兎の罝をく
椓之丁丁　これを椓うつこと丁丁たり
赳赳武夫　赳赳たる武夫は
公侯干城　公侯の干城なり

きちんとしたうさぎあみ、それをとんとんたたいている。このたくましいもののふは、とのさまたちの楯と城。

（吉川幸次郎『詩経国風』）

＊福田赳夫　三木武夫
＊谷干城
＊藤原鎌足－不比等－房前┌八束（真楯）
　　└千尋（御楯）

《資料十六》顧みないという表現

㋐陸奥国に金を出だしし詔書を賀びし歌一首　大伴家持

……海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大君の　辺にこそ死なめ　顧みは　せじと言立て……

（巻十八・四〇九四）

……海を行くならば水に浸かった屍、山を行くならば草むした屍となっても、大君のお側でこそ死のう、我が身を顧みたりはしないと誓って……

㋑防人の悲別の心を追ひ痛みて作りし歌一首

大伴家持

……鶏が鳴く　東男は　出で向かひ　顧みせずて
勇みたる　猛き軍士と　ねぎたまひ　任けのまにまに
……

（巻二十・四三三一）

……（鶏が鳴く）東国の男は、立ち向かい、後ろを振り返ることをせず勇ましい強い兵士だと、ねぎらって派遣なさるままに……

㋒足柄の　御坂賜はり　顧みず　我は越え行く　荒し男も　立しやはばかる　不破の関　越えて我は行く
……

（巻二十・常陸・四三七二）

足柄の御坂を通していただいて、うしろを振り返らずに私は越えて行く。荒くれ男も進みかねる不破の関を越えて私は行く。……

＊天平感宝（七四九年）

＊曹操―曹植

《資料十七》『文選』巻二十七

白馬篇　　曹植

棄身鋒刃端　身を鋒刃の端に棄て
性命安可懐　性命安んぞ懐ふべけんや
父母且不顧　父母すら且つ顧みず

何言子与妻　何ぞ子と妻とを言はん

身を刃の切っ先に投げ出したからには、このいのち、どうして惜しもう。

父母すら顧みず、ましてや妻子のことなど。

川合康三他『文選詩篇四』（岩波文庫）

＊匈奴

＊陳渉

《資料十八》『史記』張耳陳餘列伝

将軍、目を瞋らし膽を張り、万死一生を顧みざるの計を出だし（出万死不顧一生之計）、天下の為に残を除く。

《資料十九》李白の詩句

幽州胡馬客歌

出門不顧後　門を出でて後を顧みず

報国死何難　国に報ずる死何ぞ難からん

家を出て後をふり返ることはしない。国の為に命を捨てることなど何の難しいことがあろうか。

東海有勇婦

捐軀報夫讎　軀を捐てて夫の讎を報じ

万死不顧生　万死生を顧みず

身命をすてて夫の敵を討つ。必ず死ぬ運命だが、命など惜しくもない。

《資料二十》奥村喜和男「宣戦の布告に当り国民に愬ふ」

宣戦の詔勅を奉戴したわれら国民の決心は

今日よりは顧みなくて大君の

醜の御楯といで立つわれは

と同じ心であります。万葉の名もなき防人の歌つたこの歌は、爾来千年の間、われらの祖先が朝な夕な愛唱し続けて来たのであります。堂々と英米両国に対し宣戦の御詔勅の渙発せられたる今日こそ、一億国民の心の中にひとしくこの歌が甦つたことゝ確信いたします。

《資料二十一》東条英機「大詔を拝し奉りて」

今宣戦の　大詔を拝しまして恐懼感激に堪へず私、不肖なりと雖も一身を捧げて決死報国、唯々　宸襟を安んじ奉らんとの念願のみであります。国民諸君もまた己が身を顧みず、醜の御楯たるの光栄を同じくせらるるものと信ずるものであります。

＊松平春嶽

《資料二十二》　橘曙覧『志濃夫廼舎歌集』

小木捨九郎主に

大皇の醜の御楯といふ物は如此る物ぞと進め真前に

「大君の醜の御楯」とあの防人が詠ったのは、このようなものだと手本を示すつもりで、進め、先頭にたって。

《資料二十三》『万葉集』巻二十

我が行きの息づくしかば足柄の峰這ほ雲を見ととぷはね　（武蔵・四四二一）

右の一首は、都筑郡の上丁服部於由。

俺の旅が心配でならない時は、足柄の峰をはう雲を見ながら、俺のことを偲んでくれよ。

《資料二十四》『万葉集』巻十四　東歌

我が面の忘れむしだは国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲はせ　（三五一五）

俺の顔を忘れそうな時は、大地から湧いて峰に立ちのぼる雲を見ながら俺のことを偲んでくれよ。

《資料二十五》『日本書紀』斉明天皇四年

五月に、皇孫建王、年八歳にして薨せましぬ。今城谷の上に、殯を起てて収む。天皇、本より皇孫の有順なるを以て、器重めたまふ。故、不忍哀したまひ、傷み慟ひたまふこと極めて甚なり。群臣に詔して曰はく、「万歳千秋の後に、要ず朕が陵に合せ葬れ」とのたまふ。廼ち作歌して曰はく、

今城なる　小丘が上に　雲だにも　著くし立たば
何か歎かむ　　其一。（其二・三は略）

天皇、時時に唱ひたまひて悲哭す。